



## 6. 拠点形成の目的・必要性

この研究プログラムは「生命」、また「死」という、永遠の、またとりわけて現代的な問題を再検討して、人文社会系の諸学に根ざした新たな「死生学」の構築を目論むと同時に、現代の状況に応じて「生命」事象についての学際的連携の端緒を開こうするものである。

「生命」事象が生み出す倫理的問題、「死生」に関わる形象の文化的・歴史的広がり、「死生観」をめぐる宗教的価値観、「生命活動」の文化的発現、これら4つの観点がプログラムの柱となる。まず、脳死、安楽死、生殖医療、環境保護などの現代的課題についての社会の要請にも配慮しながら、哲学・倫理的な観点から従来の「生命倫理」や「自然哲学・科学哲学」を根本的に見直してゆく。併せて、「死生」についての文化的・価値的側面の考察の基礎としたい。その際、学問のボーダーレス化に対応すべく、自然科学や社会科学との学際的連携も大胆に試みる。

医学や生理学など自然科学系で扱う「生命」は主に、物質レベルでの機能を明らかにすることを目指しているの、人文学が扱う問題レベルとはこれまで大きな乖離があった。そこで、本拠点はその乖離を埋める役割を担うことによって、学際的な連携を生み出すことを目指す。クローン研究など先端的研究の多くがそうであるように、純粋に技術的な可能性そのものを追求する自然科学的欲求に対して、人文社会系諸学は様々な分野の歴史的背景に従って積極的に発言し、相互理解を求め、議論を深めることに関与する。こうした観点のもと、とりわけ医学系の研究者との共同作業に積極的に取り組みたい。旧来の人文学の内在的な限界を突破し、知の実践性を獲得してゆくためにも、学際的連携を進めることで、「生命」に関する現代的価値観の揺れ動きに目を注ぎ、他方ではケアや臨床の現場との対話を重ねてゆくことが必要となる。そうした試行の積み重ねのなかから、価値観の変動の問題を、その文化的・歴史的基礎に立ち返って検討することで、時代の要求する新たな価値観構築への模索を開始したい。

人文社会系研究科では、そのような観点に立って、倫理学・哲学・宗教学・社会学等の基礎的アプローチを踏まえ、人間生命の基本的活動の通時的側面と共時的側面の交錯へと迫り、「文化」が人間あるいは人類の生へとどのように組み入れられているのかを解明してゆく。テキスト研究とともに美術史等、表象文化的アプローチを通して、人類が構築してきた「生」や「死」の形象の意味の諸相を歴史的な眺望において考察する。さらに、こうした知が臨床やケ

アの現場においてどのように機能しうるかを視野に入れて、医療や教育等の実践知の開発にも関わっていくことを目指す。

欧米ではホスピス運動と連動しつつ、Death Studies が形成されてきたが、そこでは「文化」という切り口が弱い。本拠点はこの弱点を克服すべく、文化の視点、とりわけアジア文化研究の蓄積を踏まえた立場から「死生学」(Death and Life Studies)の形成を目指していく。そもそも人間の生命活動に基礎をおく文化的活動は「価値」という独自の領域を形成し、諸「価値」を不断に生み出して、また変更していくものである。とりわけそのことは、さまざまな文明における宗教・死生観をめぐる露わとなる。こうした観点に立って、「死生学」構築のための一つの重大な橋頭堡を固めるべく、死生観をめぐる諸文明の宗教的基盤とその価値観を検討することで、「価値」と人間の生死とが織りなすダイナミズムを突き詰めてゆくことを企てる。以上のような枠組みのなかで、生と死をめぐる焦眉の課題に対しても展望を拓きながら、新しい「死生学」を核とする基礎理論の構築を試みる。

生命をめぐる倫理的・価値的諸問題は、主要には、アメリカを震源地とするバイオエシックスと呼ばれる領域で研究されてきた。バイオエシックスは、しかし、一方では原理的・哲学的問題をめぐる研究を疎かにしてきたし、他方では、生命をめぐるさまざまな文化・価値観の差異に対するセンシティブィティが低く、歴史的な視点をも欠落させてきたといつてよい。基礎文化研究専攻が包括する研究分野は、まさにそうした原理的諸問題、文化的・歴史的諸問題を研究してきた歴史と蓄積を有する。本専攻を中心として、研究拠点を形成する意義の一つはここにあるといつてよい。

死をめぐる問題の考察はまた、現在では、戦争と革命の世紀であった前世紀の経験、その経験を多様なかたちで保存しようとする試みとも無縁ではありえない。基礎文化研究専攻では、従来の区分でいえば、宗教学や美術史学が、またとりわけ文化資源学専攻が、そうした視点からの研究を積みかさねてきている。そうした成果が、生命をめぐる諸問題の研究と結合される時、欧米の諸研究とは一線を画する、新たな死生学が生まれることになるであろう。基礎文化研究専攻ならびに文化資源学専攻が、そのような研究拠点として最適であることは言を待たない。本研究教育計画は、上記の、4つの研究の柱が相互連携的な研究教育を行うことによって、本研究課題に応える世界的拠点を東京大学に構築しようとするものである。

## 7. 研究実施計画

本計画を実施するため、「死生学の実践哲学的再検討」、「生と死の形象と死生観」、「死生観をめぐる文明と価値観：協調と抗争」、「生命活動の発現としての人間観の検討」という4つの具体的なサブテーマを設定し、最終的には「生命」の倫理・文化・価値をめぐる「死生学」の世界的拠点を構築・整備するという目的を総合的に達成する。

サブテーマ1：「死生学の実践哲学的再検討」——人格論、身体論、行為論、所有論、刑罰論（死刑論）といったこれまでの実践哲学的研究の問題群を、「死生学」という統一理念のもとで再検討する。また、生や死にまつわる「選択」の場面を根源的に問いなおす作業として、不確実性・曖昧性がともなう状況下で確率的な考慮のなかで決断していく際の「合理性」を主題とする問題領域、すなわち「意思決定理論」の徹底的な問いなおしを遂行する。

サブテーマ2：「生と死の形象と死生観」——生と死がどのように表現され（造形美術、墓地、記念碑）、社会からどのように扱われ（隔離、葬送儀礼、戦没者追悼施設）、どのように語られてきたか（弔辞、報道、伝記）について、その歴史と現状を研究する。とりわけ死は本質的に個人のものであるにもかかわらず、国家、職場、家族、メディアなどの他者が深く関与し、さまざまな意味を付与される。それゆえに、一方に個人的な生から疎外された無惨な死がある。このような生死をめぐる社会性を明らかにし、死を生の中に意義付けることを目指す。

サブテーマ3：「死生観をめぐる文明と価値観：協調と抗争」——死生観をめぐる諸文明の宗教的基盤とその価値観について、教義的側面と実生活の側面をあわせて理解する枠組みを設定し多元的共存への提言を行う。とりわけアジアの諸文明についての学的蓄積を踏まえ、死生観の比較の上に現代の諸問題に取り組むための知の枠組みを築くことを目指す。国際宗教学宗教学会（2005年3月に開催予定）にあわせ、世界の宗教研究者・研究機関とのネットワーク作りを行い、会議終了後も継続して研究交流を行い、共同研究や研究者招聘に反映させていく。

サブテーマ4：「生命活動の発現としての人間観の検討」——生命科学の発展に伴い、人間の「いのち」や心にどのような変容が生じているかを理解し、臨床やケアの現場で生じる諸問題に対応した死生の知の構築を目指す。生命活動の発現としての神経活動や脳活動の行動科

学的な理解を深め、「生命」に関わって人文学と生命科学の接点で生じている諸問題に取り組んでいく。また、教育や社会福祉の現場で実務者が直面している諸問題に対する科学的な研究と文化の側面からの研究とを結合させ、死生のケアに関わる新たな人間学の展望を切り開いてゆく。

以上のような目的の達成のため、以下のような年次計画を立てた。

### 平成14年度：

死生学研究会・応用倫理研究会を定期的に開催し、機関誌を刊行する。フィレンツェにおいて「形象文化と死生観」に関する研究会議を開催する。伝統文化とグローバル化との軋轢と協調に注目し、国際的な研究協力体制の構築を提言する。教育／研究用施設を充実させ、特任研究員を採用して長期的な研究計画を整える。

### 平成15年度：

死生学の実践哲学的な基礎づけと比較文化的な研究・発信のための基礎を構築すべく、規模の大きな研究会議を開始する。ホスピスの見学等、死生学の現場を訪問し、ケアや教育の現場に関わるような研究者や実務者を招いて研究交流会議を行う。市民参加のシンポジウムや若手による研究会議の充実をも目指す。

### 平成16年度：

意思決定をめぐる実践哲学的問題、戦争における死生や死者の記憶の問題、死者と生者の共生、言語表現や文学における生命観といった問題に取り組み、人文学に根ざした死生学の基礎を固める。また、考古学的な視点や社会学的な視点から、葬送をめぐる文化の歴史にも取り組む。外国語の機関誌の発行に力を入れる。

### 平成17年度：

若手研究者自身の企画による規模の大きな研究会議を行い、その成果に基づく論集を刊行する。老年学や精神医療や社会福祉との関わりを重んじ、ケアの現場での実務者や当事者との交流をいっそう深め、社会のニーズに合致した死生学の応用的側面を強化する。また、生命倫理の諸問題への取り組みを充実させる。

### 平成18年度：

海外での研究会議を行い、外国語による機関誌等をいっそう充実させ、世界的な研究拠点としての機能を強化する。とくに若手研究者が海外で研究成果を発信できるような体制の構築をさらに固めていく。また、人文社会系の諸部門や他の研究領域の研究者との連携関係を確認し、今後のいっそうの研究充実への布石とする。

## 8. 教育実施計画

本研究プログラムの目指す「死生学」が対象とするものは、よき生き方、よき死に方とは何かという人間存在の本質に触れる問題であり、人類永遠の課題である。

研究教育活動の事業推進担当者は人文社会系の諸領域に広がり、さらに医療や教育の分野にも及んでいる。人文学の基礎的な諸分野と社会・心理等の実務や現場に関わる諸分野から構成されることを反映して、教育計画も、生命の倫理・文化・価値を問う基礎的、理念的なアプローチと、そこでの研究成果を現実の社会に還元、資源化する実践的なアプローチとを含み、両者の交流も課題となる。

また、すでに基礎的な専門教育を受けた博士課程の後期以降の若手研究者に対する教育と、それ以前の大学院生や学部学生への教育とに分けられる。なお、前者については、当初は「教育」の領域というより「研究」の領域のことと理解していたのであるが、発足後、とりわけ中間評価語、「教育」の領域として強調すべき事柄になってきたとの理解のもとに、ここでは発足前野の「教育実施計画」と、中間評価後段階での「教育実施計画」をあわせて述べていく。

### (1) 博士課程の後期以降の若手研究者に対する教育

関連する諸学問分野からPDレベルの特任研究員や大学院博士後期課程レベルのRAを採用し、死生学の研究に当たらせるとともに、相互に研究交流を行い、刺激し合うことを目指す。採用する分野はできるだけ広い範囲に及び、多様な研究方法に依拠する者達が相互影響しあえるようにする。

とりわけ、理論的・テキスト研究的な分野の研究者と、現場との交流や調査・実験といった方法を身につけてきた研究者とが相互に討議し合う場の構築を目指す。外国人との研究交流や外国語による研究成果の発表に親しませ、その能力を高めるよう導くことが目指される。将来、死生学に関わる実務家の養成が行えるような体制の構築を目指し、そのための準備に取り組む。

具体的には、以下のような方策で、若手研究者の実力を育成することを目指す。

①機関誌として『死生学研究』を刊行し、若手研究者の積極的な寄稿を促す。

②外国語の機関誌や論集を刊行するが、そこでも若手の寄稿の機会を増やすように努める。

③広い分野の若手研究者を担い手として、定期的に若手主体の死生学研究会を開き、討議を

行う。

④理論的な側面に力を入れ、応用倫理研究会を定期的に関き、活発な討議を促す。

⑤死生学に関連する諸施設への見学、また現場での実務に携わる人々との交流の機会を設ける。

⑥若手研究者自身の企画により、多くの若手研究者が刺激しあうような研究会議を国内、海外双方で行う。

⑦研究拠点として行う研究会議においても、若手研究者の参加の機会を増やすよう努める。

### (2) 博士課程中間までの大学院生、また学部生への教育

博士課程のある段階までの大学院の教育・研究や学部段階での教育においても、死生学の本格的な導入に向けた準備を進める。

まず、人文社会系研究科に開設されている多分野交流演習に「死生学」のプログラムを設定する。これは学問分野を問わず、学部生から若手研究者まで参加できるものとし、学生を学際的な知の形成の現場に立ち合わせることに主眼がある。生命の尊厳や死生の価値といったテーマを設定し、教育系や医学系の研究者、さらには実務家や芸術家等にも参加してもらい、狭い専門学科の知とは異なる、市民生活に開かれた学知のあり方を学ばせる。

また、2002年度より開設された応用倫理教育プログラムを拡大発展させる。生命倫理、環境倫理、情報倫理等の諸問題を扱うこの教育プログラムは、文学部・人文社会系研究科の責任において行われるが、研究拠点形成プログラムと密接に連携しつつ行われるものである。演習形式も交え、全学からの学生の参加を促し、新たな学際的な教育の展望を切り開くことを目指している。

これらの教育プログラムには、医学系研究科の教官の参加を求める等、臨床的・現場的な関心が積極的に盛り込まれる。それは、伝統的な人文系の教育のあり方を越えていく可能性をもつ。これまでの人文社会系の学問は主にテキストの解読に重心を置いてきたため、そこでの教育は自然物としての人間、個体としての生死への視点欠如につながりやすかった。他方、高度に専門化、細分化された医学等、自然科学系の分野の学生に対する教育の現場でも同様の問題を抱えるとともに、生命をめぐる文化・価値観の差異や歴史に対する視点の欠落が認められる。医学や自然科学分野の学生の教育への人文社会系学問の参入は、これら双方の欠陥の克服に通じるはずである。

## 9. 研究教育拠点形成活動実績

### ① 目的の達成状況

#### 1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

従来、欧米で形成され、日本に輸入された死生学 (Death Studies) は、ホスピス運動と連動して発展してきたものである。また、それと並行して発展してきた欧米の生命倫理学は自律の価値に重きを置く点に特徴がある。こうした欧米の学問的業績を踏まえつつも、本研究拠点は分厚い伝統をもつ日本の人文学の伝統を活かし、日本から発信する新たな死生学 (Death and Life Studies) の基礎の構築を目指すものだった。それは古今東西の哲学・倫理・宗教・文学・芸術等の知の蓄積に基づいて、死生に関わるより複雑で奥深い新たな知の体系を目指すものであり、その展望に照らしつつ、大きな成果をあげてきた。

この5年間に東京、フィレンツェ、トゥルーズ、チュービンゲン等において総計52回のシンポジウム、ワークショップ、講演会を挙行、東京での国際研究会議・講演会だけをとりても欧米・アジアから総勢57名の第一線の研究者を招聘して研究交流を進め、新たな死生学の構築に努めてきた。東京大学人文社会系研究科は、西洋の知の伝統に長く親しむとともに、アジアの思想・文化伝統の研究においても傑出した実績をもち、これらの成果を継承しつつ現代人の死生をめぐる問いに応答しようとする試みは、世界的にも独自の研究拠点形成に確実な成果を残した。

中間評価において「当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される」と高い評価を得、その成果に基づいて寄付講座 (2007年度より発足) を獲得したことはその顕著な現れである。他方、死生学は医療や教育やケア等を通して市民の死生の現場とも深く関わる。本研究拠点への社会の関心は強く、公開の催しを通して市民や専門家との交流を深め、対話を重ねる試みにも力を入れた。これら研究成果の全体は、『死生学研究』(第1—8号)、12冊のブックレットや報告書に収められるとともに、2007年より『シリーズ死生学』(全5巻、東大出版会)として刊行される運びとなっている。

本拠点では上述の研究活動全体に若手研究者を関与させるとともに、教員と合同の研究会や海外研究旅行等を開催、将来を担う研究者の育成にとくに力を注いだ。特任研究員23名、特任アシスタント30名を採用してその研究活動

を支援し、さらに特任以外の若手研究者に個別プロジェクトを募集して支援経費を支給、学会活動や資料調査、とりわけ海外での活動を容易ならしめた。若手研究者は学外、学内他部局から広く公募によって採用し、相互刺激により活気を得た。若手研究者自身の企画による研究活動として、国内で他大学研究者と共同の次世代死生学研究会議 (2005年)、チュービンゲンで「生と死の未来」、トゥルーズで「死とその向こう側Ⅱ」(ともに2006年)を挙行し、その成果が刊行された。若手育成の成果の例をあげれば、特任研究員のうち1名がミンガン大学教員に、9名が国内の大学教員 (助教2名を含む) に採用された。また『死生学研究』には83篇の若手研究者の論文が掲載されているが、これらは研究者育成の成果を雄弁に物語るものである。

#### 2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

5年間にあわせて23名の特任研究員 (PDレベル) と30名の特任アシスタント (博士課程在学者)、さらに若手支援経費研究者16名を採用し、死生学研究会、応用倫理研究会、また国際研究会議や公開講演会やワークショップ、その他の研究交流への参加を通して、研究者・教育者としての育成に努めてきた。

また、若手研究者には積極的に海外での調査や資料収集、研究交流に参加するように促し、そうした活動の展望をもつ研究者の支援を強化した。他方、海外から21世紀COE「死生学の構築」の活動を知り、別の費用で来日し、積極的に活動に参加しようとする海外の若手研究者も数名おり、彼らの参加は若手の研究交流にとって意義深いものとなった。

とりわけ大きな意義をもったのは、若手研究者と博士課程在学者自身によって企画・運営された以下の3つの研究会議やワークショップである。

(1) 2005年11月には21世紀COE「死生学の構築」のメンバー31名と京都大学人間・環境学研究科の7名の若手研究者、博士課程在学者が集って研究会議を行った。その成果は『次世代死生学論集』(2006年3月)にまとめられている。

(2) 2006年9月にはドイツのチュービンゲン大学において、「生と死の未来」と題するワークショップを行った。その成果は、英語による報告書、*The Future of Life and Death* (2007年1月刊行)にまとめられている。

(3) また、2006年10月にはフランスのトゥルーズ大学で「死とその向こう側」と題す

るワークショップを行った。その成果は、フランス語と日本語による報告書、*La Mort et les au-delàs II* (2007年3月刊行)にまとめられている。

これらの会議の準備には多くの時間を費やしたが、それに値するだけの充実した討議と交流経験が得られた。若手研究者と博士課程在学者が同世代の国内、海外の研究者と長時間にわたってじかに交流し、問題意識を磨き合ったことには、予想以上の教育的効果があった。

これらの若手研究者と博士課程在学者が執筆した論文で、『死生学研究』誌に掲載されたもの83本、『次世代死生学論集』に掲載されたもの35本、*Bulletin of Death and Life Studies* (2007年1月刊行)に掲載されたもの2本、*The Future of Life and Death*に掲載されたもの6本、*La Mort et les au-delàs* に掲載されたもの10本である。

21世紀COE「死生学の構築」による若手研究者と博士課程在学者の育成、支援は予想以上の成果を生んでいる。何よりも分野を超えて、また大学を超え、国境を越えて若手研究者と博士課程在学者が研究交流を進めることによる教育効果は重ねて強調するに値する。当COEの研究会議を通して得た国際的ネットワークを活用して、研究の幅を広げている若手研究者も数名いる。

### 3) 研究活動面での新たな分野の創成と、学術的知見等

本研究拠点はこの5年間に、死生学の基礎づくりのための豊かな成果を得ることができた。それは、大きく(1)死生の文化の比較研究、(2)死生の倫理や実践に関わる理論的哲学的考察、(3)人文学の現代的実践現場への関与、の3つの項目に整理できよう。

(1) 死生の文化の比較研究——欧米の死生学は現場の実践的な知を目指す学を超えるものではなく、本格的な人文学者の仕事と狭く特化された死生学の研究との間には距離がある。Ph・アリエスの『死を前にした人間』のような、稀に見られる広さと深さをあわせもった死生の文化の比較研究も、その資料は西洋の枠内にとどまっており、アジアの文化を視野に入れた死生の文化の比較研究の成果は乏しい。本拠点は古今東西の死生の文化の比較研究において、これまでの内外の水準を越える成果をあげることができた。

(2) 死生の倫理や実践に関わる理論的考察——本拠点は死生学の基礎理論の考察と生命倫理等の実践哲学の深化に努めてきた。そこで明らかになってきたことは、現代の欧米のケアの理論や実践哲学がキリスト教や啓蒙主義の諸前提に深く根を下ろし、それを相対化するのが容易でないという問題だった。日本の人文社会系諸学は西洋の諸学を吸収しつつ、日本の文化土壌において血肉化するという難問と取り組んで来たが、本拠点はこうして培われた学問的伝統に根ざし、死生の倫理やケア実践、そこでの自由・責任に関わる理論的哲学的考察を進め、独自の成果をあげることができた。

(3) 人文学の現代的実践現場への関与——古典研究に根を持つ人文学は一般教養としての意義を唱えつつ、現代社会のアクチュアルな現場の問題への関与には距離をとりがちだった。市民生活のニーズに関わる人文学の実践的展開が求められているが、本拠点は、社会学、心理学等と連携し、また医学、教育学、法学系の諸研究科と共同し、実践的展開を進め深めることによって、人文学の新たな展開を実現してきた。

これらは以下のような研究会議や研究成果の公表を通じて達成され、確認されてきたものである。

a) 国際研究会議——以下に催された国際研究会議(シンポジウム、ワークショップ等)を列挙する。外国で開催されたものは開催場所を示す。また、登壇した外国人研究者の数をあげておく。(1)「洋の東西の思想に見られる死後の世界観」(2003年3月、フィレンツェにて、3人)、(2)「仏教における死生観」(2003年6月、8人)、(3)「いのちの始まりと死生観」(2003年6月、4人)、(4)「生命科学とスピリチュアリティ」(2003年10月、1人)、(5)「死者と生者の共同性」(2003年11月、5人)、(6)「墓地に映された生者の世界」(2004年5月、1人)、(7)「死生のケア・教育・文化の課題」(2004年6月、2人)、(8)「生死をめぐる同意と決定」(2004年12月、4人)、(9)「儒教における生と死」(2005年4月、1人)、(10)「死とその向こう側」(2006年2月、10人)、(11)「生と死の未来」(2006年9月、チュービンゲンにて、6人)、(12)「死とその向こう側」(13)「精神医療と触法行為の死生学」(2006年12月、1人)、(14)「聖なるイメージ」(2006年12月、1人)。さらに、

外国人講師を招いての死生学研究講演会は、2003年から2006年末までに、24回に及んでいる。特任教授として招聘されたハーヴァード大学の杜維明教授には、1度のシンポジウム、3度の講演研究会で登壇願っている。

**b) その他の研究会議**——日本人の研究者を招いての研究会議やシンポジウムは以下のとおりである。(1)「いのちの終わり」と死生観」(2003年6月)、(2)「関東大震災と記録映画」(2003年8月)、(3)「死生観と心理学」(2003年9月)、(4)「死の臨床と死生学」(2004年6月)、(5)「べてるに学ぶ」(2004年11月)、(6)「現代日本の葬送儀礼のゆくえ」(2005年7月)、(7)「ケアと自己決定」(2005年11月)、(8)「生死を超えて——ふたたび仏教を問う」(2006年4月)、(9)「死の臨床をささえるもの」(2006年12月)、(10)「死生の社会学」(2006年12月)。加えて若手研究者による「次世代死生学研究学会——深化と展開」(2005年11月)を開催している。さらに日本人講師による講演研究会が7回行われている。

a) b)にあげた研究会議では、死生学の諸分野の問題が取り上げられ、今後の研究課題が確認されるとともに、死生学の構築に資する数多くの研究成果も公表された。

**c) 研究成果の公表・公開**——主要な成果は、『死生学研究』(1-8号)に公表されている。掲載されている論文の総数は158篇で、翻訳によるもの31篇である。また、*Bulletin of Death and Life Studies* (vol. 1-3)にはあわせて32篇の外国語論文が掲載されている。他にも12冊のブックレットや報告書(うち、外国語によるもの5冊)が刊行されている。これらの刊行物には、本研究拠点で21世紀COE「死生学の構築」において達成した成果が示されている。

#### 4) 事業推進担当者相互の有機的連携

事業推進担当者は人文社会系研究科基礎文化専攻を中心として、研究科内外の幅広い分野に関わる研究者を含んでいた。これまでさほどの交流がなかった研究者の間できわめて有益な研究交流がなされた。とりわけ、医学系研究科や教育学研究科から加わった事業推進担当者との研究交流には意義深いものがあった。

#### 5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

死生学研究教育拠点は、東西文化の接点と

しての人文科学研究を進めてきた、東京大学のような歴史ある総合大学だからこそ形成可能な組織である。時代に即応しながらその長所を発展させていくことによって、人文社会系における東京大学の国際競争力を高めるのに大いに貢献したと考える。

#### 6) 国内外に向けた情報発信

充実した内容をもつ多くの刊行物を刊行し、情報発信に努めた。また、ホームページを通じての情報発信にも力を入れた。本研究教育拠点の催しはしばしば一般ジャーナリズムから注目され、新聞紙面等で度々取り上げられた。海外からも問い合わせや資料の請求が頻繁に寄せられた。

#### 7) 拠点形成費等補助金の使途について(拠点形成のために効果的に使用されたか)

拠点形成費等補助金の主要な用途は若手の人材育成と研究会議の開催費用、および研究成果の公表のための刊行費に当てられた。その詳細はこれまでに述べてきたとおりだが、それぞれきわめて有効に使用された。

#### ②今後の展望

平成19年4月より、人文社会系研究科次世代人文開発センターに、上廣死生学講座が寄付講座として開設されたが、この講座が東京大学における今後の死生学の発展のための一つの柱となる。他方、グローバルCOE拠点形成プログラムに「死生学の展開と組織化」との題で応募しており、採用されればこれがもう一つの柱となる。これらにより、人文社会系研究科を中心として、さらに他部局との協力を強め、研究教育両面、とりわけ教育面における死生学の強化を進めていく。

#### ③その他(世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度)

「知の構造化」を進める東京大学の内部において、文科・理科の枠を越えた「知の構造化」のあり方を例示し、多くの部局から関心をよび、大学の今後の発展に一つの方向性を示すことができた。

また、国内・国外を問わず、当該領域の多くの研究機関や研究者の関心をよび、今後の世界の死生学の発展において独自の位置を占める、有力な世界的研究教育拠点としての立場を確立することができたと信ずる。

## 21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機関名	東京大学	拠点番号	D04
拠点のプログラム名称	生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築		
<p>1. 研究活動実績</p> <p>この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】</p> <p>・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕</p> <p>・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの</p> <p>著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入</p> <p>波下線（_____）：拠点からコピーが提出されている論文</p> <p>下線（_____）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生</p> <p>島蘭進、『いのちの始まりの生命倫理 受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』春秋社、v+326ページ、2006年1月</p> <p>Susumu SHIMAZONO, <i>From Salvation to Spirituality: Popular Religious Movements in Modern Japan</i>, Trans Pacific Press, pp. x+348, 2004 (September).</p> <p>島蘭進、『つながりの中の癒し セラピー文化の展開』（田邊信太郎と共編）専修大学出版局、xii+312+8ページ（序章「セラピー文化のゆくえ」1-33ページ、「はしがき」（田邊信太郎と共著）iii-xiページ）、2002年5月</p> <p>竹内整一、『「おのずから」と「みずから」 日本思想の基層』春秋社、262頁、2004年2月</p> <p>竹内整一、「「おのずから」と「みずから」の倫理学」、『木曾教育』第80号、27頁～59頁 木曾教育会、2005年4月</p> <p>下田正弘（共著）『なぜ非暴力なのか 仏教における暴力の自覚』末木文美士編『仏教と現代』佼成出版社、pp.80-100, 2006.</p> <p>下田正弘（共著）『近代仏教学の展開とアジア認識』岸本美緒編『帝国日本の学知・東洋学の磁場』岩波書店、pp.173-214, 2006.</p> <p>下田正弘（共著）『開かれた倫理へ 古代インドにおける仏教の誕生』加藤信朗編『共生と平和への道 報復の正義から赦しの正義へ』春秋社、2005, pp.149-165.</p> <p>下田正弘（共著）『聖なる書物のかなたへ 新たなる仏教史へ』鶴岡賀雄・関一敏編『言語と身体 聖なるもの場と媒体』岩波講座・宗教5, 2004, pp.25-52.</p> <p>Masahiro Shimoda, "Stupa Worship as Historical Background to Tathagagarbha Theory: As Suggested by Several Seemingly Irrelevant Texts," Publication Committee for Buddhist and Indian Studies in Honor of Professor Sodo Mori (ed.), <i>Buddhist and Indian Studies in Honor of Professor Sodo Mori</i>, Hamamatsu: Kokusai Bukkyoto Kyokai, 2002, pp.247-258.</p> <p>一ノ瀬正樹、『原因と理由の迷宮 - 「なぜならば」の哲学』、勁草書房、317頁、2006年5月</p> <p>Masaki ICHINOSE, "Bayesianism, Medical Decisions, and Responsibility" <i>Philosophy of Uncertainty and Medical Decisions</i>, Bulletin of Death and Life Studies, vol.2, 21st Century COE Program DALs, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, pp.15-42, January 2006</p> <p>一ノ瀬正樹、「歴史認識における因果と確率」、『哲学』No.56、日本哲学会、pp.42-62、2005年4月</p> <p>Masaki ICHINOSE, "A Note on Abortion and the Sorites Paradox" <i>The Journal of Applied Ethics and Philosophy</i>, Vol. 2, Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, pp.1-9, December 2004</p> <p>一ノ瀬正樹、「「死ぬ権利」の欺瞞」、『死生学研究』2003年春号、東京大学大学院人文社会系研究科、pp.36-68, 2003年3月</p> <p>熊野純彦、『西洋哲学史 近代から現代へ』本文261頁+索引他31頁、岩波新書 2006年</p> <p>熊野純彦、『西洋哲学史 古代から中世へ』本文257頁+索引他33頁、岩波新書 2006年</p> <p>熊野純彦、『メルロ＝ポンティ 哲学者は詩人でありうるか?』全118頁、NHK出版 2005年</p> <p>熊野純彦、『戦後思想の一断面 哲学者廣松渉の軌跡』本文265頁+索引4頁、ナカニシヤ出版 2004年</p> <p>熊野純彦、『差異と隔たり 他なるものへの倫理』本文240頁+索引4頁、岩波書店 2003年</p> <p>池澤 優、「親の死はその罪か 敦煌文書書儀類に見る死と礼と孝と」、『死生学研究』2005年秋号（東京大学大学院人文社会系研究科）、8～37頁、2005年</p> <p>池澤 優、「『孝』の文化的意義 漢代における生者 - 死者関係を中心に」、渡邊義浩編『両漢の儒教と政治権力』、汲古書院、73～96頁、2005年</p> <p>池澤 優、「中国中世における“死者性”の転倒 六朝志怪を中心に」、松村一男編『生と死の神話』、LITHON、57～94頁、2004年</p> <p>鈴木 泉、「顔の形而上学」、『レヴィナス ヘブライズムとヘレニズム』哲学雑誌第121巻第793号、有斐閣、哲学会編、pp.37-56、2006年</p>			

## 国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

2003年3月21日フィレンツェ ウフィッツィ美術館/国際シンポジウム「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」105人(70人)、

エンリコ・カステルヌオーヴォ(ピサ高等師範学校教授)カテリーナ・リメンターニ・ヴィルデイス(パドヴァ大学教授)マリア・グラツィア・チャルディ・デュプレ・ダル・ポジエツト(フィレンツェ大学教授)

2003年6月6~7日東京大学文学部/シンポジウム「死生学と応用倫理」450人(55人)

Anthony Hope(Oxford University) Julian Savulescu(Oxford University) Hillel Levine(ユダヤ教宗教社会学、Boston University)

2003年11月28日~29日東京大学文学部/シンポジウム「死者と生者の共同性」400人(48人)

Guenther Poeltner(ウィーン大学) Stephen Teiser(プリンストン大学) James H. Foard(アリゾナ州立大学)

2004年 6月12日、26日東京大学医学部/シンポジウム「死生観とケアの現場」480人(8人)

アラン・ケリヒア(東京大学)カール・ベッカー(京都大学)柳田邦男(作家)

2004年11月5日東京大学医学部 鉄門講堂/シンポジウム「べてるに学ぶ ―《おりていく》生き方」400人(10人)

田口ランディ(作家)向谷地生良(北海道医療大学看護福祉学部 浦河赤十字病院ソーシャルワーカー)上野千鶴子(東京大学)

2005年4月23日東京大学医学部/公開シンポジウム「儒教における生と死」150人(人)

杜維明(ハーヴァード大学燕京研究所所長 ハーヴァード大学東アジア言語・文明学科教授)坂部 恵(桜美林大学)小島 毅(東京大学)

2006年2月18日~19日東京大学文学部/国際研究会議「死とその向こう側」120人(15人)

フランソワ・ラシヨ(フランス国立極東学院)フランシスキュス・ヴェレレン(フランス国立極東学院)アンヌ・ブッシィ(フランス国立極東学院)

2006年9月24日チュービンゲン大学/Workshop "The Future of Life and Death" 50人(25人)

Prof. Dr. Eve-Marie Engels, Tübingen University Prof. Susumu Shimazono, Tokyo University Prof. Dr. Robert Horres

2006年10月2日トゥールーズ大学/ Workshop "La mort et les au-delà II : conception et représentations de la mort dans les arts, la religion et la culture"50人(25人)

Jean-Pierre ALBERT(フランス国立極東学院)、Anne BOUCHY(フランス国立極東学院)、Marine CARRIN(フランス国立極東学院)

2006年12月2日東京大学医学部/公開シンポジウム「死の臨床をささえるもの」200人(6人)

大井玄(終末期医療/東京大学医学部名誉教授)芹沢俊介(評論家)田口ランディ(作家)

2006年12月9日東京大学文学部/シンポジウム「精神医療と触法行為の死生学 -殺人行為をめぐる-」100人(5人)

Jill Peay(London School of Economics, Mental Health Law)小田晋(帝塚山学院大学)加藤尚武(東京大学)

2006年12月16日東京大学文学部/シンポジウム「聖なるイメージ：彼岸とのコミュニケーションの手段として」80人(5人)

Gerhard Wolf(Director, Kunstgeschichtliches Institut zu Florenz)奥健夫(文化庁文化財調査官)秋山 聡(東京大学)

## 2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

これまで死生学に関連する諸専攻分野で研究を進めてきた博士課程学生や若手研究者（PD）に、新たに死生学分野での研究への取り組みを促した。そして、若手自身の企画による研究会議や研究会を開催し、他大学、また外国の若手研究者らと交流し、切磋琢磨しつつ研究論文の形でその成果を刊行していくよう指導した。研究会議や論文の発表においては、外国語での発表の機会ができるだけ多くなることを目指した。以下、具体的活動を記す。

### 死生学研究会（若手による研究会）

2003-2007年の間、18回開催。毎回10-30人程度の出席。

### 応用倫理勉強会（哲学研究室を中心とした研究会）

2003-2007年の間、8回開催。毎回20-30人程度の出席。

### 刊行物における若手（若手研究者と博士課程在学者）の論文数

『死生学研究』 83本

『次世代死生学論集』 35本

Bulletin of Death and Life Studies (2007年1月刊行) 2本

The Future of Life and Death 6本

La Mort et les au-delà 10本

### 若手研究者が中心となって開催された研究会およびその出席者数

- ・次世代死生学研究会議-深化と展開-（2005年11月3日（木）-5日（土）、田辺市）46人
- ・Workshop "The Future of Life and Death"（2006年9月24日、チュービンゲン市[ドイツ]）50人
- ・Workshop "La mort et les au-delà II : Conception et représentations de la mort dans les arts, la religion et la culture"（2006年10月2日、トゥルーズ市[フランス]）50人

### 大学院学生等の雇用状況

- ・COE経費で雇用した者

RA のべ47名（年平均およそ9名）

ポストク のべ50名（年平均およそ10名）

研究員（ポストクをのぞく） のべ17名（年平均およそ3名）

支援員 のべ10名（年平均2名）

- ・その他の経費で雇用した者（学内経費、科研費、外部資金など）

RA のべ44名（年平均およそ9名）

- ・日本学術振興会特別研究員

DC（21世紀COE枠） 2名

DC のべ83名（年平均およそ17名）

PD のべ74名（年平均およそ15名）

- ・以上の雇用についての選考内規

特任研究員選考委員会を設け、候補者から研究テーマと研究計画等を予め提出させ、面接等の方法で選考を行なう。その際、博士号取得者を博士号未取得者より優先する。

### 若手研究者支援研究費受給者

平成16年度：7名（50万円）2名（30万円）

平成17年度：4名（50万円）4名（30万円）

平成18年度：6名（50万円）5名（30万円）

- ・受給者選考内規

大学院博士課程の学生又は単位取得退学者又は博士課程修了者で、本COEの運営について関与しうる者。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は概ね達成され、期待どおりの成果があった

(コメント)

研究教育拠点形成計画全体としては、「死生学」という新たな学術分野の創出に向けて概ね成果をあげたと評価できる。

人材育成面では、中心的推進計画と並行して、若手研究者による自発的研究活動が盛んであり、本プログラム機関誌『死生学研究』とは別に、35論文を収める『次世代死生学論集』を刊行、また、博士学位取得や研究職への就職は順調であり、大きな成果があったと評価できる。

研究活動面では、東洋文化と西洋文化との両面を吸収し、独自の文化を形成してきた日本の立場から、両文化における各死生観の比較研究を軸にして推進し、多くの国際会議の開催を経つつ、一定の成果を上げたことは評価できる。

補助事業終了後も本プログラムの成果に基づく持続的な展開を期待したい。

なお、中間評価において、①「アジア文化（仏教、道教など）からの視点による深化」、②「臨床性ある実習者養成の方法の具体化」が求められた。①の中国関係については、杜維明氏を中心とするシンポジウム1回、講演研究会3回は開催されたものの、杜維明氏を中心とすることに限定されており、同氏にとどまらず世界的見地からいかなる深化があったか明確な像を結ぶに至らず、「アジアからの視点」を通じてという特色を生かした比較研究の達成度は十分とは言えない。②については、その成果の具体性に乏しい。本プログラム採択時の特色の1つであったのに、結果として後退であることは否めない。

この①、②その他の課題を克服し、アジアの伝統的諸死生観を土台として、どのような学問体系を組み上げ、それと既存の欧米中心のそれといかにすりあわせ、その先にどのような実践倫理を生み出すのか、といった大目的について、今後の努力に期待する。